

学校点描

続

寒い中でしたが新入生説明会に来年の新入生と保護者が集まって下さいました。新たな伝統が積み重なります。

《M中学校》

NO.15

R6. 12. 4

担当：校長

このたび、第76回M上学童展において、以下の生徒が素晴らしい成果を収めました。

【奨励賞】・T・Sさん「私の心の領域は立ち入り禁止です!!!」

・I・Aさん「はちが夢みた世界」

・S・Hさん「日常」

【佳作】・W・Kさん、A・Nさん、A・Nさん、S・Yさん、K・Tさん、S・Yさん

11月22日（金）から11月28日（木）16時まで、ゆめりあ「花と緑の交流広場」に1年生7名、2年生6名、3年生11名の生徒作品が展示されました。

また、11月27日（水）の放課後には、全ての部活動生徒と希望者を対象に、体育館で初めてのスポーツ講習会を開催しました。講師として後藤一志さんをお招きし、生徒たちは運動障害の予防や競技力向上の基礎となるストレッチ方法を学びました。この内容は、年末年始や冬季のトレーニングにも役立てられるものです。次回12月11日の講習会も予定しておりますので、引き続きご期待ください。



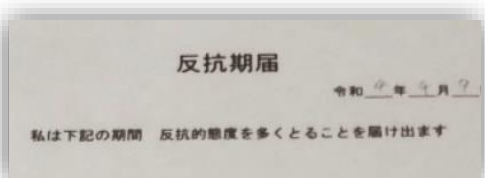
親の苦勞と子の成長

帰り道、ラジオで中学2年生の息子が親に「反抗期届」を提出した話を耳にし

ました。届出には、「朝は起こさない」「部屋の掃除は月1回」「家族行事はその都度相談」

と、反抗期の自分の扱いを細かく指定してあり

ます。大人には思いつかない発想に驚きつつ、親を信頼しているからこそその行動だと感じました。



先日、ある学校の授業の中でこんな議論がおきました。家庭科の授業で「自分の役割」をテーマに話し合いをした際、一人の生徒が、「自分がやるべきことを親に決められるのが嫌だ」ということがある」と話しました。すると、別の生徒が、「でも、親があれこれ言うのは、自分のことを気にかけているからだ」という。何も言われたいのは、それも寂しいよね」と言いました。その場の空気が一瞬柔らかくなり、親への反発だけではなく、感謝や信頼が言葉の端々に見える瞬間でした。

最近観た映画『山の郵便配達』を思い出します。中国湖南省の山岳地帯を舞

台にした映画で、人ひとりがやっと通れる険しい山道をひたすら歩いて郵便配達をする様子をドキュメンタリーにしたものです。険しい山道を舞台に、父から息子へ郵便配達の仕事が引き継がれる物語です。

ある村に着きます。全盲の老婆に軍隊に行った孫からの封筒を渡しました。中には仕送りが同封されていました。老婆は、お金を包んでいた白い紙を渡し、「手紙を読んでくれ」と頼むのです。父は読み上げます。

「おばあさん、目はどうですか？腰の具合はどうですか？こちらは順調です。なかなか帰れないので困ったことがあったら郵便配達の人に頼んでください。」老婆はそっとつぶやきました。「いつも同じだな」と。すると父は、息子に手紙を渡して、「続きはお前が読め」と言いました。息子が手紙を見ます。

白紙でした。

息子は戸惑いながら、何も書かれていない紙を見て、「一人暮らしは大変だね。帰ったら一緒に暮らしましょう。」と続けました。息子は父の長年の思いに気づきます。そして、冷たい川を渡る際、父を背負いながら「父は自分が思うより軽かった」ことを知ります。その旅は、父が息子の成長を認め、息子が父の苦勞を知る初めての親子の旅でした。



映画のシーンを思い返すたび、親と子がお互いを理解し合う大切さを思います。家庭科の授業の一コマにも、日常の中で育まれる親子のつながりが確かに存在していることを感じます。

ラジオの「反抗期届」は、期限が過ぎると取り消しにされたそうです。

きりとりせん

ご意見・ご感想をお願いします。

Shinyatk1616n@yahoo.co.jp